ふかまちのまど
第一六号
九五年八月一日

「育つ」・「育てる」

第二中学校校長　清水靖夫

先日、ある大学病院の小児科病棟に行く機会がありました。七夕の日に使ったと思われる竹笹にたくさんの短冊がつけてありました。

短冊を書いた人はまちまちでも、書かれた内容はどれも“そうだろうな　と納得のいくものばかりでした。

例えば、「早くよくなって、元気で遊べますように」、「元気になって、手術ができますように」、「お母さんの料理を皆と食べたいな」など、異口同音ながら親の愛情あふれる願いや、どこにでも転がっていそうな子どもの小さな願いなど、読んでいて胸が熱くなりました。

「野性児」という言葉をお聞きになったことがありますか。人間の接触から極度に隔離され、あるいは動物と接触し、動物のなかで育った子どものことをいいます。野性児は例外なしに口がきけず、人間のような発声もありません。また、二本足で直立することができず、歩くときに掌や膝頭を使うので、その部分の皮膚はとくにかたくなっていたようです。嗅覚、聴覚、視覚は動物的な鋭敏さをもち、目は夜でも見ることができ、食事の習慣も人間のようでなく、生の肉を常食にしたり、食事をとる行動の型も動物に似ており、食べる前に臭いをかぎ、口を食べ物にもっていって食べます。衣服もつけず体を何かで覆うこともなく、裸体に対して羞恥感もありません。泣いたり、涙を流したり、笑ったりするような情緒的表情はありませんが、激しい怒りのような攻撃的情緒は見られたようです。

フランスの医師イタールは、アベロンの野性児（フランスのアベロンの森で発見された野性児）を5年間の根気強い教育では同年齢の人間と同様にすることができず教育を放棄しましたが、人間生活を妨害しない程度に適応できるようにはなったそうです。

さてさて、「子育て」とはよく言ったものだと、その立場にある者として責任を感ずる毎日です。▲▲

☆夏季教育特集☆

―子そだてを考える―

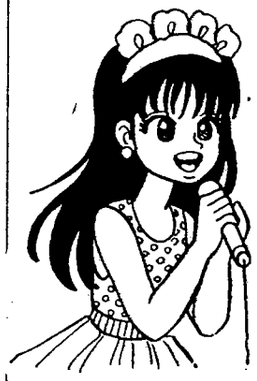
習わせたい病

東峠　兼長和幸

子供が生まれて数年すると、必ず母親が罹る病気がある。名付けて「何か習わせたい病」という。公園で我が子を遊ばせていると、仲良しのあの子がいくら待っても出てこない。そういえば昨日も。とたんにそわそわしてくる。子供の将来を思う親の愛は皆同じものだろうが、つい近所の子と比較して考えしえてしまう。

今の時代、英語ぐらい習わせたるべきではないか、可能性を伸ばしてやれるのは親の義務ではないか。

早ければ早いほどよいというし。こう考えてくると思いはいろいろと乱れる。水泳。英語。ピアノ。これが「おけいこ」のベスト3だとか。他にも習字、絵画、珠算等週に三回、四回と通わしる母親もいる。



「本人が行きたがっているから」と自らに言い聞かせて通わせている。「おけいこ」は、「塾」の道へと開かれ、管理教育へと直結している。

その道筋は分るのだが、手を拱くばかりでもいられない。連れ合いに相談しても、教育は母親の役目とばかり頼りにならぬ。「習わせたい病」の母親の迷いは一段と深まって行く。▲▲

よく学び　よく遊べ

高崎壽郎

子どもの成長に、「よく学びよく遊ぶ」ことが大切ことは以前からよくいわれていますが、今の子は本当によく学び、よく遊べるような環境になっているでしょうか。

今は、学歴社会の反映か、猫の手も借りたい時や休日でも、勉強・勉強という風潮です。学校での授業、家での宿題や予習復習、学習塾通い。これでは、子どももたまったものではありません。人間はそんなに集中できません。どこかで手抜きをします。

偏見もあると思いますが、学校では授業中の欠伸や無気力。家では、勉強しているような恰好してマンガやテレビゲーム。塾帰りの夜遊びなど。「うちの子に限って」が本当にあるのです。「学校は授業料はいらないが、塾は月謝がいるんよ。しっかり勉強してき」という教育ママ。ここまできては「豈、何おか言わん哉」です、

学校での勉強はどうなっているのでしょう。私は、勉強は学校にお願いしたいと思うし、本来そうあるべきものと思います。先生方も、今以上に研鑽を積まれ教育内容の充実を図っていただきたいものです。

「遊び」は大切です。子ども達は遊びを通して、連帯・協調・忍耐・友情・創造などいろいろ学び体得していきます。

昔は、遊びの先生は年上の子でした。彼らは、良いことも良くないことも教えてくれました。暑くても寒くても、野山を走り回ったり、自分らで遊びを工夫しました。今は、外遊びをする子はほとんど見ません。

少子化時代で、グループ遊びを知らないのかもわかりません。その意味でも、学校・家庭・地域が休日となった第二・第四土曜日の有意義な過ごし方を子ども達と共に考えていきたいと思います。

私達の子ども時代は、勉強は学校で、家では遊びやお手伝いでした。私は、勉強と遊び・スポーツは両立できると思います。

「私達はよい時代に育ったが、今の子どもは可哀想」と簡単に片付けないで、二十一世紀を担う子ども達のためにも、よい教育環境づくりをしていきたいものです。▲▲

お悔やみ申し上げます

▼中元久幸様　七月二三日　六九才

町内各種団体行事予定

★尚寿会
▼仏経講演会　小学校　八月九日
★女性会
▼ヤッサ・盆行事参加
▼料理教室　八月六日
▼親睦会　上二五日　中五日　下四日
★消防団
▼分団対抗ソフト　八月六日
★子ども会
▼三原やっさ参加（大人と合同）
★小学校

席望展

「親孝行したい時に親はなし」という諺がある。この論法で言えば、子そだてを考える時に子どもなし」と言うことになる。「もはや戦後ではない」と白書が書いた三一年頃の成長分野は、住宅防衛・教育といわれた▼高学歴社会になった現在も当時と変わりなく教育産業は健在である。知識の詰込みに主眼がおかれ、公徳心や情操教育がおろそかになり投資効率重視の企業型教育に成長？した。▼おはよう、こんにちは、さようならのあいさつを先ずしようとの呼びかけを今年二月この紙面で高崎さんがなされた。子どもに「あいさつを」という前に、大人が範を示したい。▼銀行のドアを押せば「いらっしゃいませ」の声が耳にとどく。用事をすませて帰るときも声をかけられる。躾けと教育の結果であろう。行政は最大のサービス産業と位置づけた市（出雲市）も現われた。知識教育と同時に人づくりも。

ふかまちのまど 2

夏期教育特集

ぼんくらっ子と天才子

松尾　斎藤哲三

わが家の一年二か月になるちびっ子はおぢいちゃんが大好きです。毎日暑いので水場の遊びにおじいちゃんはすぐカランをひねって水を出してやります。ちびちゃんは大声で「きやっきやっ」とはしやぎながら水に手を差し出したり、バケツで受けてはうつしています。にこにこしながら黙って見守っているおじいちゃやんの顔を見上げながら又続けます。

服や靴が大分濡れてきたようです。おばあちゃんが来ました。「おじいちゃん止めさしなさい風邪をひくからママに叱られますよ」おじいちゃんはそれでも黙って見守っています。

新聞をおじいちゃんが読んでいると、ちびちゃんがそれを横取りします。よだれを垂らしながら「とうちゃんのぶっぶっ」(とうちゃんの自動車)と言いながらページをめくります。じいちゃんは黙って見ています。

じいちゃんが碁石を並べていると、ちびちゃんがかきまわします。時々碁石を口にいれようとします。大変です。おじいちゃんは黙ってちびちゃんの手を押えて遮ります。

テレビを見ているとちびちゃんはチャンネルに触ります。「あまり近寄って見てはいけません」と注意されます。おじいちゃんは、あわてゝ音を小さくしたり消したりすることもあります。

幼児の頭の中は空っぽで白紙のようなものです。そこで見るもの、聞くもの、触れるものが好奇心となって、それを貪欲に取り込んでいるようです。これを端からできるだけ余分の世話をやかないで、笑顔で黙って見ていてやると、それは幼児の好奇心への働きを大変助長することになるようです。そこで幼児はそれを反復するようになります。

その事は将来、読書、趣味、研究心等の素養ととなってとても役に立つことになるようです。これとは逆に頭ごしに規制や、干渉ばかりしますとどうでしよう。好奇心への働きはしぼんでしまいにはシャットアウトされます。

この事は幼児の世界だれでなく、大人の世界でも同じ事が言えるのではないでしょうか。

▲▲

ひろしま

石井良雄

一

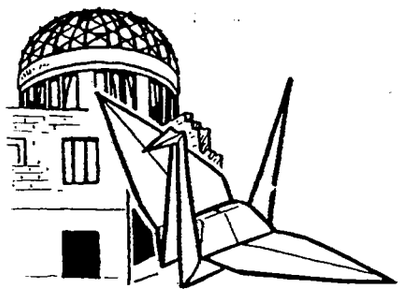
天は許さぬ原爆の
廃虚となった死の町に
静かに黒い雨が降る
だれが泣くのかむせび泣き
天が泣いてる地はうめく

二

父をかえせ母かえせ
嫁にも行かず待っていた
娘をかえせ　孫かえせ
たった一人の愛児を
かえせ　かえせと泣く家族

三

七つの川の水清く
流れてやまぬ広島の
夜明けだ朝ださあ起きよ
平和の鐘がなっている
文化花咲く町つくろう
あゝ広島に栄えあれ



盆行事のお知らせ

盆行事実行委員会長　村上徹郎

月日　八月十五日
時間　午後六時四十五分
場所　深小学校々庭

行事　慰霊祭
太鼓踊り
手踊り
カラオケ
くじ引き
夜　店

☆多数参加ください☆

慰霊祭について

対象
◆昨年八月十六日以降今年八月十五日の間に亡くなられた方。
◆戦没者の方。

準備
◆対象家庭へ講役員がお伺いし、位牌又は写真をお借りします。ご協力ください。

子ども将棋教室開講

初心者歓迎

対象　小・中学生
日時　九月より
第二・第四土曜日
午前　九時半から
午前十一時半まで
場所　深町民会館
費用　無料
指導　高崎壽郎四段

★問い合わせは高崎
☎六三－四七五六

夫の姿 ―追憶―

音石金子

あれ程強い体でも
たった二字の病にて
負けてこの世を
去ろうとは
夢にも思わぬ
悲しさよ

心と姿をとゝのえて
今日も一日元気よく
命ある限り
働ける姿を夢にして
我が身消ゆるを
忘れてぞ